HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学図書館の現場から - NACSIS-CAT カタロギングリポート
Author(s)	佐々木, 光子
Citation	情報の科学と技術, 46(3), 128-135
Issue Date	1996-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/354
Type	article (author version)
File Information	sasaki.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大学図書館の現場から
-NACSIS-CAT ｶﾀﾛｷﾞﾝｸﾞﾘﾎﾟｰﾄ-

北海道大学附属図書館　佐々木光子

[抄録]
学術情報センター目録所在情報サービス(NACSIS-CAT)の利用開始から１０年を経て、総合目録データベースの書誌レコード数は、和図書 1,104,623 件、洋図書 1,556,801 件、Recon 736,766('95.12.8)と膨大な書誌ユーティリティーに発展してきた。これは、NACSIS-CAT に参加している全国 420('96.1.10)の利用機関の目録業務に携わるカタロガーの協力、共同分担目録システム(Shared Cataloging)の成果でもあろう。NACSIS-CAT による目録業務データを言語別・出版年別のコピーカタロギング、オリジナルカタロギング率から検討して言語の問題を指摘し、書誌調整記録データの分析からその効率的軽減・軽量化について述べる。

[キーワード]
NACSIS-CAT, 総合目録データベース, 書誌調整, 共同分担目録, コピーカタロギング, オリジナルカタロギング,言語マニュアル

1. はじめに

大学図書館の一隅で目録実務を担当している一カタロガーの立場から、学術情報センター目録所在情報サービス(以下、NACSIS-CAT という)を利用した業務データの簡単な分析を行いカタロギングの現状を明らかにし、あわせて問題点、及び NACSIS-CAT への希望・期待を述べたい。

北海道大学附属図書館情報システムは学術情報センターが 1986 年 4 月に発足すると同時に汎用機導入による業務電算化に踏み切り、目録業務もそれまでのカードカタロギングから、NACSIS-CAT 利用の全国規模のオンライン共同分担目録方式へ移行し、総合目録データベース形成の一端を担うことになった。目録の舞台はカタロガー個人の机上のカードから、一躍ネットワーク上の全国共有の書誌レコード作成画面へと様変わり。

Shared Network Database 上の Shared Cataloging の威力は、この９年間で、新規受入と 1987 年から計画的に実施されてきた遡及入力事業分とをあわせると、北大の全蔵書(1995.3 末、3,036,982 冊)のほぼ 70%がデータベース化されオンラインで検索可能になったという、このこと一つにも顕著に表れている。カード時代には現実問題としては想定し難かった目録業務の効率化、検索機能の拡大等、カードカタロギングとの比較論議さえ既に昔話となり、北大キャンパス内の目録実務担当者の半数は、今や"目録=NACSIS-CAT" のカタロガーで占められている。北大内部での目録業務サブシステムの技術的改善、機能性の追求も続けられている。1995 年 4 月の UNIX による新システム移行１）に際して、例えば旧システムでは手入力であった検索語の自動切り出しが実現するなど着実に改良は進んでいる。

キャンパス内のカタロギングの実態は、どの学問分野の資料を扱うかによって大きく二分されているように見受けられる。理工農医系では大半がコピーカタロギングで処理でき、オリジナルカタロギングは主題が周辺領域のものや地方出版物などでそれ程多くはないという。一方、人文社会科学系では、特に英語以外の洋書では参照 MARC のヒット率も低くオリジナルカタロギング率が高い。

当然カタロガーの問題意識も異ってきており、前者では、簡単・楽ではあっても目録自体がパターン化されすぎ本領が問われなくなってしまったという不満足感が聞かれるし、後者には特殊言語２）など一カタロガーの能力、努力に余る資料を手にして、少なくとも他館のカタロガーを「同じ本？」３）　ﾗﾋﾞﾘﾝｽに巻き込む事のないレベルの識別・同定可能なﾚｺｰﾄﾞを作成しなければならないという悪戦苦闘の悩みがある。

ところで、北大には図書館職員有志による「火曜日の勉強会」という自主学習グループ

がある。この第９回例会(1994.4.19)のテーマは「目録は不要か？」で、紹介論文のJ.D.LeBlanc「Cataloging in the 1990s: managing the crisis (mentality)」４）を論拠に、目録業務の現状を巡って興味深い論議が交わされた。

1941 年、A.Osborn は、「Crisis in cataloging」５）を書いて、急増し続ける資料の滞貨を前に、量のためにどこまで質を犠牲にできるのか？質対量のせめぎ合いに "目録の危機" と命名したが、質量共に両立させようとの追求は、AACR2 や ISBD, コンピュータ時代以降のオンラインデータベースや Shared cataloging の普及を現実のものとし、目録実務を飛躍的に効率化しカタロギングの現場にも大きな変革をもたらした。今、危機はより多角的視点から論じられている。

最近の志保田論文６）では、効率的コピーカタロギングの普及や整理業務の委託・外注が、目録作業を質量共に大幅に軽減し、整理技術部門の縮小どころか将来的には他部門へ吸収、消滅されゆくべきものとの"挑戦論"を紹介して、逆に整理技術部門に属するカタロガーの専門性を厳しく問い正している。図書館員の二極分化７）が進みひとにぎりの専門的職員とアルバイト的職員に... と指摘されるまでもなく、事実二極化する目録作業８）の実態は、各種図書館の中にあって、より高度に専門化、細分化された情報・資料の集積・サーヴィスの窓口たる大学図書館のカタロガーとしては大いに議論を要するところである。

前述、LeBlanc は、"危機" への具体的対応策の中で、MARC、あるいは高品質のメンバー館参加書誌レコードのコピーカタロギングを推進すること、そのためにも、よりよいオリギナルカタロギングが確保されねばならず、品質向上のためにはマニュアルの整備、カタロガーの継続的職業教育や主題・言語知識を備えた最適人材の適用などあらゆる努力をすべきであると述べている。本リポートも又、こうした問題意識のうえに進めるものである。

2. 北分館洋図書 NC ファイルヒット率

北分館は北大キャンパスの北部、高等教育機能開発総合ｾﾝﾀｰ（旧教養部）と言語文化部の建物群に隣接、昨年３月末の教養部解消を機に教養分館から改称された。サービス対象の中心は一、二年次の学生約 5､500 名、及び言語文化部、高等教育機能開発総合センター所属教官約 90 名。平成６年度統計９）によると、蔵書冊数 233,888 冊、受入図書数 25,579 冊(含管理換等、通常受入和図書・洋図書合計はほぼ 6,500 冊)、雑誌受入種数 941 誌、新聞 14 種、他に北分館内ビデオ室、LL 室、言語文化部語学演習室用視聴覚資料を多数受け入れている。言語文化部には主に教養期の外国語教育を担当する教官が所属しており、そのこともあって種々の言語図書が受け入れられている。

2.1 言語別 N ファイルヒット率

筆者は 1992 年 4 月北分館に異動し、10 年振り、電算化後は初めての目録実務についた。以前に目録システム地域講習会を終了していたが、学内の新任・異動者を対象とする附属図書館主催の研修を終了後、業務を開始した。分担した洋図書・視聴覚資料のうち、洋図書は言語文化部教官研究室に所蔵されるものが大半を占め、主題別にみると言語・文学・歴史・社会・芸術・哲学と人文社会科学系図書がほとんどである。

端末操作・カタロギングにも少々慣れた頃、どうも実際のヒット率が、既に報告されていた統計数値１０）１１）１２）１３）ほどは高くないと感じだした。使用言語別ヒット率に関しては精細な分析１１）があったのだが、北分館の場合はどうかと、手元でメモ表を付け始めたのが８月末であった。一応、年度末でまとめてみた。１４）

結果は、全 1846 冊のうち総合目録に既に書誌レコードのあったもの 77%、参照 MARC にヒットしたもの 8%、残る 15%がオリジナルカタロギングであった。オリジナルカタロギングの内訳を見ると､さすがに英語は 3%と低いものの､ドイツ語 16%､フランス語 37%､イタリア語 28%、ロシア語 22%、ギリシャ語その他が 36%と、日頃疎遠な言語程オリジナルカタロギングが高率であることが明らかになった。NC 総合目録のヒット率平均より

少々高めなのも言語構成からして致し方のないことと納得した。

2.2　出版年別 NC ファイルヒット率

翌'93 年度に通常受入図書と平行して寄贈コレクションの整理を始めた。出版年の古い英語図書が多いせいかヒット率は急降下した。出版年とヒット率の関連についても北分館の場合はどうかと、再び出版年別、言語別メモ表を付け始めたのが 7 月中旬、年度末に計 1782 書誌についてまとめてみた。１５）　高ヒット率のはずの英語図書でも出版年の古いものが多いとオリジナル率は 21%と跳ね上がり、以下ドイツ語・フランス語共 32%、イタリア語 72%、ロシア語 23%、その他 46%、全体の 26%がオリジナルカタロギングという、前年よりかなり高い数値がでた。

図１は、上述の事情から不完全ではあるものの、２年間の北分館受入洋図書(視聴覚資料を除く)の言語別構成比である。不定期受入の英語コレクションを考慮すれば平均値は英語がほぼ 50%で、順次ドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語、その他となる。ちなみにその他 52 冊の内訳は、チェコ語 32 冊、ラテン語 6 冊、ポーランド語 5 冊、スロバキア語 4 冊、オランダ語 3 冊、マケドニア語・スウェーデン語各 1 冊で、洋図書に使用されていた言語種類数は 12 言語であった。

図２は、図１の言語別 NC ファイルヒット率である。全体でみると、72%は既に総合目録に書誌レコードがあり、8%は参照 MARC にヒット、残りの 20%がオリジナルカタロギングである。が、言語別にみると英語の 13%から、イタリア語の 40%、その他の 46%まで，学術情報上の多用言語とマイナーな言語との差は大きい。その他の言語の LCMARC ヒット率が高いのは、チェコ語図書 32 冊のうち、総合目録には 4 書誌ヒットにすぎなかったものが、LCMARC には予想外の 16 書誌、50%もの高ヒットであったことによる。

図３は、'93 年度集計分 1782 冊のみの出版年別の NC ファイルヒット率である。データベースの構築過程、参照 MARC の収載内容からして 1971 年以降のヒット率の高さは当然としても、1970 年以前のヒット率の健闘振りは、1987 年来の情報センターの遡及変換事業、及び全国各大学の遡及入力事業による書誌レコード増加の成果であろうか。しかし、逆に出版年を遡っての遡及入力は新刊図書に比べ今だに困難さを伴うことをも示している。なお、言語別には特筆すべき差は認められなかった。

2.3 オリジナルカタロギング

-1995 年刊ロシア語図書の場合-

ソ連邦解体後入荷状況が思わしくなかったロシア語図書だが、最近、1994 年、1995 年出版のものが多数手元に回ってくるようになった。英独仏に比べオリジナルカタロギングには手間暇かかる言語である。古図書や復刻版などの方が遥かに専門性を要求される分野ではあるが、試みに 1995 年出版のロシア語図書(1995.12.1.調査　言語ロシア語と出版年 1995 年との検索結果 297 書誌のうち、標題・本文共ロシア語の 205 書誌について)のオリジナルカタロギングを行った図書館数を調べてみたのが、図４である。

ロシア語資料の一部分とはいうものの、83%が 6 館によって作成されており、一書誌作成館 4 館も含めて新規作成に携わっているのは 18 館。大学レベルで見ると、A 館、D 館をふくむＴ総合大学が全 4 館で 77 書誌、38%を作成している。学術情報センターシステムの要である総合目録データベースを形成している基盤は意外と心もとないものだと感じるのは、北分館が C 館であるせいだけであろうか？全国の大学図書館の整理部門で働く図書館職員 2,703 人１６）の配置の適材適所、分業化専業化の緩やかで有効な方策を立てられないだろうか？

2.4 よりよいオリジナルカタロギングのために

-[特殊]言語サポート体制を-

ある数量の多言語混在の目録用図書が回ってくると、まず、即処理可能なものを引き抜

いて終了させ、量の圧迫感から解放されたところで、苦手言語に取りかかる。NC ファイルを次々覗いて類似書誌を探し回る、次は辞書やマニュアル類と首っ引き、時には他の図書館員に相談、あるいは該当図書を発注した研究者に問い合わせたり最終的に書誌レコードのデータチェックをお願いしたり…　不得手な、理解できない言語を相手に時間とエネルギーを費やし作成するデータ。

NACSIS-CAT が動き始めて 10 年間、目録に関する基準や規則の整備は着々と進んで目録の標準化・均質化が定着しつつある現在、オリジナルカタロギングのキーワードは”言語”に尽きるのではないか と実感する。目録対象資料を言語ごとどこまで読解できるかでレコードの品質は決まるのではないだろうか。

不案内な特殊言語資料とその目録化に関しては、林論文２）１７）が的確に実状を伝え、辞書の引き方・取り扱い方の解説アニュアル等、カタロギングの業務マニュアルとしての言語に関する実務・実用書の必要性を強調しているが全く同感である。同氏のタイ語早見表２）をいつ遭遇するかもしれない言語への備えとしてコピーファイルした図書館員も多数いるはずである。

ドイツ語、フランス語の MARC 導入の話は無理な注文だったのであろうか？

遡及入力も視点を変えて、量から質の拡充へ。特殊言語資料所蔵館の遡及入力を積極的に進めてはどうだろうか。例えば、東外大ニュース１８）によると、「30(細かく見れば 100 以上)言語の資料を整理するという困難さを伴いながらも多言語資料の情報の管理が使命である以上、<遡及入力>をやらねばなるまい、単に蔵書数によるのではない蔵書の性格による定員増を…」とは附属図書館長の弁である。それら資料の丁寧なオリジナルカタロギングは書誌ユーティリティの内容充実のみならず、カタロガーのテキストとしての教育的効果も大きいに違いない。

最後に、NACSIS-CAT にオリジナルカタロギング支援体制として申告制書誌レコードチェック制度を機能させられないものだろうか？　新規作成済みレコードのチェックを、あらかじめリストアップされている依頼先へ情報源など添えて送る方法である。依頼先は、その分野の資料を集中所蔵する図書館でもよいし、適任の個人でもよい、そこには作成、修正、調整に関する一定の権限を持たせてもよい。この制度で期待できるメリットは、カタロガーの精神的負担が軽くなり多方面の多数館によるオリジナルカタロギングが進む、新規作成の段階で品質管理が完了する、品質アップと修正結果の学習効果で総合的な実力アップになるはずである。

資料は研究者・研究目的としての主題のもとに収集される。大学図書館は高度な専門図書館としての情報集積の場であり、従って参考資料も豊富、研究者の知識も内包した、良質のオリジナルカタロギングに相応しい場である。カタロギングのためのみならず他言語への対応力はどの部門の図書館員にも期待される能力・技能ではある。システム全体としての対応策を考えてよい時期であろう。

3. 増加する書誌調整

NACSIS-CAT の目録データベースはオンラインネットワークを通して共同分担目録方式により、一資料一書誌レコードの原則で作成・管理され所蔵館によって共有されている。目録作業は、まず、手元の資料とデータベースに既に作成されている書誌レコードとの同定・識別作業を繰り返し行うことによって、コピーカタロギングの場合は効率性を享受できる一方、オリジナルカタロギングに際しては全国レベルの視野に立ち、基準・規則に従い標準化された一定の品質条件を満たした共有資源としてのレコードを期待される。多数の参加館と膨大な書誌レコードを結ぶネット上で、重複書誌作成は厳に避けなければならないとなれば、どうしても派生してくるのがいわゆる書誌調整作業である。作成館への書誌レコードの記述と情報源資料との照合確認依頼に始まり、協議、修正あるいは削除、更に結果の所蔵館への連絡迄、一連の作業は結構な時間とエネルギーを要し、これを効率よく標準化する事は、即目録作業の省力化となる。

1993 年 12 月、コーディングマニュアルに、図書書誌レコード修正指針が加わり、レコード修正の方法及び判断基準が明示された。以後、実務は指針に従って進めればよいという点では大幅に前進したが、具体的な作業軽減のための改善策は講じられていず、指針策定に至る論議経過の一端を伝える「北の文庫 NACSIS-CAT 特集号」１９）の出版された 5 年前と同じ 電話とファクシミリが頼りである。

3.1 所蔵館間書誌調整

調整作業の主体となるのは情報源を所蔵している所蔵館間で行われるものだが、他に情報センターとの間で行われる報告・質問・依頼１９）がある。

今回は、総数では、遥かに多いと推察される所蔵館間での書誌調整作業データ控えを調査対象とした。

3.1.1 書誌調整件数の推移

図５は、北分館の３年間の所蔵館間書誌調整依頼・受信数の推移を示している。約半数は遡及入力がらみのものだが、この増加傾向は、データベースの書誌レコード総量の増加、あるいは指針の策定により調整作業がより広範な担当者に浸透した結果であろうか。昨年の 4 月から 12 月迄の全 223 件中、私自身が扱ったのは洋図書全件にプラス和書の 170 件分であるが、これは時には入力端末の前に居るよりも、コピーを切ったり貼ったり FAX を送ったりで日が暮れることもあるほどの作業量である。なお、同期間の情報センターとの調整・連絡件数は､52 件であった。

3.1.2 1 館当たり依頼件数と館数

表１は、1995 年 4－12 月の、北分館から発信した 121 件の、一館当たり依頼件数と依頼先館数である。20 件、11､10 件と集中している館は北大と同じく大量の遡及入力を実施した館であり、従って受信件数も比較的多い関係にある。９か月間に 47 館もの相互協力の上に調整作業が成り立っていることを改めて思いしらされる。合計件数が依頼件数より多いのは作成館で情報源の確認ができないため同じデータを数館に依頼するケースがあるためである。

3.1.3 調整に要した日数

図６は、依頼発信後、回答・協議を経て調整完了までに要した日数の調査結果である。4 年前に比べ各館の協力はより早い対応へと改善されてきている。発信当日 21%、翌日 22%と一両日中に 43%､一週間で 71%が完了している｡一月以上の 5%の改善を是非望みたい。

3.1.4 調整内容別件数

表２は、全調整件数 223 件の内容別件数結果である。
書誌記述項目順に表示したが、調整依頼発信は 121 件、受信は 59 件、又その修正結果の連絡、作業のための所蔵リンク変更依頼、自館発見修正結果連絡などの発信が 25 件、受信が 18 件である。

内容では、PTBL(親書誌)関連が計 72 件と際だって多く、以下 PUB の出版年にかんする 44 件､ED の版表示にかんして 17 件､PHYS 頁付け、大きさにかんする 16 件と続く。いずれも書誌単位に関わる事項で、重複書誌を発生させないために必要な確認作業である。

3.2 オリジナルカタロギングは慎重・丁寧に

調整作業の内容を見ると、最多の親書誌関係では、ズサンな重複書誌の存在（スペルミス、冠詞の有無、並列標題、ハイフン・スペース・区切り、出版社...)
と、それとのリンクには驚くばかりである。どんな場合でも、正しい検索が基本だが、検索不足のまま安易に新規作成し、結果として、本来不要なはずの大量の調整作業を発生さ

せてしまっている。まず、検索を想定されうるいくつかのパターン(既成レコードにスペルミスなどの多いこと。言語別のスペルチェッカーが利用できれば単純ミス回避は可能）も含めて確実にすること、新規作成に当たっては、コピー先の MARC や類似書誌の各フィールドを、特に書誌単位に関わる項目について必ず再確認することである。それだけでも、無意味・不愉快な調整は半減されるはずである。語学力不足からくる重複書誌・誤書誌も散見されるが、辞書を引ける種類の言語なら調べることである。
通常の作業上必要とされる、あるいは目録の基準や規則の解釈の揺れなどという次元の調整は微々たるもので、原因は単純なところに潜んでいる。

3.3 ２番目の所蔵登録館に望むこと

既に多数の所蔵館がリンクされている書誌の調整依頼の結果、単純ミスでしたと折り返し修正終了の回答を貰うことが多々ある。又、既に作成されていた書誌が誤書誌であるために、新たに正規の書誌を作成しているケースにもしばしば遭遇する。誤書誌にリンクするのも、調整依頼も嫌という結果は、最初の館へは調整依頼を発信、２館目には調整結果重複の連絡を入れるという倍の作業となる。所蔵２館目のカタロガーは書誌レコードに新規作成の半分の気配りをして誤りは２館目で修正してしまいたい。

3.4 調整作業は E-Mail で

調整作業の軽量化･効率化については既に E-Mai 利用の提案がされている１９）２０）。NACSIS-CAT のシステム内に連絡・調整のためのメニューを設け、書誌・所蔵・所蔵館レコードを取り込んで同報送信機能も利用することが可能になれば... というより、それが NACSIS-CAT に相応しい連絡・調整法というべきであろう。近い将来の具体化を期待している。

4. まとめ

NACSIS-CAT を利用して目録業務を行ってきた中で感じてきた、よりよい総合目録データベース形成のための期待を、言語の問題と書誌調整作業に関して述べてきた。確かに目録の現場は変化しているが、その変化は急激なものではなく、まだ暫くは個々のカタロガーの孤独な悩み多きカタロギングは続いていく。

となれば、益々増え続ける情報・資料にたいし量対質問題解決のためにも、Shared cataloging の有効性を最大限有利に展開させ、コピーカタロギングの高率的利用、それを保障する高品質オリギナルカタロギングの確保をシステム内に確立していくことである。
インターネットと喧しくいわれる現在こそ分散・孤立している個々のカタロガーの能力・知識をネット上で繋ぎ専門化・分業化してカタロギンの効率アップに活用することで、不要な調整作業の軽減をはかることも可能になるだろうというのが、さしあたりの結論である。

作図については、附属図書館情報システム課情報処理掛松尾博朋氏の協力を得た。記して感謝する。

参照文献

1) 北海道大学附属図書館次期システム館内準備委員会. UNIX マシンによる大規模図書館システム -北海道大学 図書館情報システム-. 大学図書館研究. 47, p.32-43 (1995.8)
2) 特殊言語という言葉の定義については、
林哲也. 技術的知識としての実用語学:翻字とタイ語早 見表を例として. 大学図書館研究. 44, p.40-49(1994. 8)
注 6) ...日本で一般に学習機会が少なく、従って、そ の処理能力を持ち合わせている者も少ない言語を、便 宜的に「特殊言語」と称することにする。 とあり。
[星野雅英. 遡及変換と総合目録データベース. 情報の 科学と技術. 42, p.219-228(1992)

には、洋書の "特　殊言語カード(東南アジア、アラビア語系言語等)" の　記述もあり]
3) 高野彰. 同じ本？ 大学図書館研究. 47, p.14-23(19　95.8)
4) LeBlanc, James D. Cataloging in the 1990s: mana　ging the crisis (mentality). Library resources &　technical services. 37, p.423-433(1993)
5) Osborn, Andrew D. The crisis in cataloging. The　library quarterly. 11, p.393-411(1941)
6) 志保田務. 集中・分担目録時代の整理業務の位相. 図　書館界. 47, p.112-121(1995.9)
7) 田中力. 大学図書館における司書の働き. 図書館界.　45, p.237-239(1993.6)
8) 大石博昭. NACSIS-CAT をつかって仕事をすること -　すべてを語れるわけではないが. 図書館雑誌. 89, p.　248-249(1995.4)
9) 北海道の図書館. 平成７年４月１日現在. 北海道図書　館振興協議会. 1995.12. p.72-73.
10) 根岸正光, 猪瀬博編. "付論 学術情報センター目録　システムの関連諸統計とその分析. 6 図書総合目録に　おけるヒット率". 図書館システムの将来像 -密結合型　図書館ネットワークと電子図書館-. 東京, 紀伊国屋書　店, 1991, p.219-223.
11) 石井啓豊. わが国の大学図書館における資源共有か　らみた目録所在情報データベースの評価. 大学図書館　研究. 37, p.9-25(1991)
12) 石井啓豊. "目録所在情報データベースの統計的分析　". 分類と索引とデータベース. 山田常雄氏追悼論集刊　行会, 1990, p.257-291
13) 八木敬子, 辻本一好, 北克一. 目録担当者から見た　NACSIS 総合目録データベース. 情報の科学と技術. 39　p.201-210(1989)
14) 佐々木光子. NACSIS-CAT に期待する"知恵袋"機能.　大学の図書館. 12(237), p.140-141(1993.8)
15) 佐々木光子. NACSIS-CAT に期待する"知恵袋"機能 -　その後-. 13(250), p.163-164(1994.9)
16) 大学図書館実態調査結果報告. 平成６年度. 文部省　学術国際局学術情報課.　1995.3. p.41
17) 林哲也. 語学マニュアルの拡充に向けて -辞書の引　き方を例として-. 現代の図書館. 32, p.148-153(199　4)
18) 国松昭. <新生>図書館をめぐって. 東外大ニュース.　No.90, p.5(1995.9)
19) NACSIS-CAT. 北の文庫. 18, p.1-55(1991.4)
*富田健市, 渋谷真理子, 神崎一江, 藤島隆. 共有レコ　ードの修正を巡って. p.29-35.
*南舘義孝, 力石貢子, 小陳佐和子, 栄野川敦. 書誌　同定 -重複書誌を作成しないために-. p.1-8.
の論文等
20) 高井力, 松井幸子. NACSIS-CAT における連絡・調整　作業の課題 -参加機関から学術情報センターへの報告　・質問の分析-. 大学図書館研究. 40, p.9-21(1992.9)